

盛岡滞の罪と罰雑考(三)

著者	吉田 正志
雑誌名	法学
巻	82
号	6
ページ	79-116
発行年	2019-02-28
URL	http://hdl.handle.net/10097/00125910

盛岡藩の罪と罰雑考（三）

吉田 正志

はじめに

第一章 死後の世界と裁判・刑罰

第一節 亡魂が密通を告発

第二節 墓所で判決申し渡し

第三節 墓に板囲い

第四節 屍仕置とは何か？

第二章 死刑制度の諸特徴

第一節 各種処刑場

第二節 「鋸挽之上磔」の不採用

第三節 放火犯への刑罰は火罪にあらず

第四節 掘物師の身分（以上八二巻四号）

第三章 手前仕置と仲間仕置

第一節 手前仕置——その一・給人

第二節 手前仕置——その二・武士の親類

第三節 手前仕置——その三・百姓、町人

第四節 手前仕置——その四・主人

第五節 無礼討ちの作法

第六節 座頭仲間の仕置

第七節 山伏仲間の仕置

第八節 乞食仲間の仕置（以上八二巻五号）

第四章 責任能力と刑罰の減輕

第一節 乱心の取り扱い

第二節 幼年者は数え十五歳未満

第三節 飢饉時の盗み

第四節 内済の可否

第五章 追放刑と身体刑

第一節 場所が指定された追放刑

第二節 新田・鉾山への追放刑

第三節 身体刑の不採用（以上本号）

第六章 犯罪捜査の諸手段と護送・牢

第一節 現金を掲示した囑託札

第二節 人相書

第三節 目安箱の変遷

第四節 死にくじと神判

第五節 目明しの公認

第六節 護送体制と大名家格

第七節 牢の諸相

おわりに

第四章 責任能力と刑罰の減軽

第一節 乱心の取り扱い

『文化律』の乱心規定

江戸時代には、さまざまな精神の変調を「乱心」ないし「乱気」と呼んだ。『文化律』第七九条は「乱気ニて人殺之事」と題して、次の三項の条文をおいている。

一 乱気ニて人を殺候共可為下手人、然共、乱心之証摺慥ニ有之、被殺候者之主人并親類等、下手人御免願出候ニおゐてハ、遂詮議可相伺、

但、主殺・親殺たりと言共、乱気於無紛ハ死罪、自滅致候ハ、死骸取捨可申付事、

一 乱心ニて其人より至て輕者を致殺害候ハ、下手人ニ不及事、外慮外者を切殺候時、切捨成程之高下之可為心得事、

一 乱心ニて火を付候者、乱心之証摺不分明候ニおゐてハ死罪、乱心ニ於無紛ハ押込置候様、親類え可申付事、

この規定は江戸幕府の『公事方御定書』下巻第七八条「乱気ニて人殺之事」をほとんど引き写したものである。内容はいささか込み入っているが、次に各項ごとに解説を加えよう。

江戸幕府の乱心取り扱い

その前に、盛岡藩が手本にした江戸幕府の乱心者の取り扱いについて、簡単に触れておく。現在のよう¹⁾に精神医療等が発達していなかった江戸時代のことだから、犯罪者が本当に乱心かどうかを判断することが非常に困難であつたろうことは容易に想像される。そのため、乱心と思われる者による人殺しでも、あるときは通常人と同様に処罰し、あるときはいくぶん軽くするなど、統一できていなかったが、そのような紆余曲折を経て、ようやく『公事方御定書』下巻第七八条を確定した。これは上記のように、『文化律』第七九条とほとんど同文なので、冒頭の『文化律』第七九条を利用して解説する。

まず第一項だが、原則は、たとえ乱心が事実であつても、殺人に対しては最も残虐度の低い死刑執行方法である下手人という死刑が科せられる。しかし、例外として、乱心が確かで、しかも被害者の主人や親類が加害者を死刑にしないではしいと願ひ出るならば、それを考慮するとする。もつとも、主殺し・親殺しの場合は、乱気でも死罪を免れず、自死したら死骸を取り捨てとして弔うことを禁じる。

第二項は、乱心での人殺しでも、加害者と被害者との身分の高下が、無礼討ち、つまり武士が不屈きな庶民を切り殺しても罪に問われない程度の開きがあるならば、下手人

にはしないということである。第三項は乱心による放火についてで、乱心かどうか分らないときは死罪とし、乱心はつきりしていれば親類に預けて押し込めておくというものである。

したがって、乱心者の犯罪を完全に通常人と同じに扱うのではなく、それなりに一定の考慮を払うというのが江戸幕府が『公事方御定書』で示した姿勢で、しかも第一項の実際の取り扱いでは、例外である主人や親類から加害者を許してほしいという願い——これを「宥免願い」などと呼ぶ——を出させるように努めたといわれる。

『文化律』制定以前の判例

それでは、盛岡藩は、この『文化律』を制定する以前では、乱心をどのように取り扱っていただろうか。関係する判例を紹介するが、乱心に関する判例はきわめて多くあり、そのすべてを採り上げることはとうていできないし、またその必要もない。ここではごく限られた重要な判例を掲げるに止める。

① 『雑書』正保四年（一六四七）八月九日条（二巻、二

三二頁）

まず比較的早い事例である。田名部（むつ市）に鷹待に派遣された三ヶ尻弥兵衛組同心の善五郎がふと気が違つて奥内村（青森市）の百姓喜藤二郎を切り殺した。このため

善五郎は現地で成敗された。この時期には、殺人を犯した乱心者が藩役人の手で成敗されるほか、暴れた乱心者は取り押さえようとした者の手で（『雑書』明暦二年（二五六）五月二十八日条（二巻、三六頁））、下人の場合は主人の手で（『雑書』寛文八年（一六六八）十二月七日条（同上、七〇五頁））、それぞれ成敗されている例がある。

② 『雑書』寛文九年（一六六九）閏十月十六日、十八日、二十一日条（二巻、八二八頁、八三〇頁）

花巻給人の川村茂兵衛が十五日の朝乱心して女房を切り殺す事件が生じた。茂兵衛本人が早く切腹したいというのでそれを許し、二十一日に松庵寺（花巻市）で切腹した。

この事件では一応茂兵衛が乱心となつてゐるが、すぐに本心に戻り、みずから切腹したいといつてゐるので、何か事情があつたのかもしれない。しかし、乱心した武士が妻を切り殺したことで切腹している事例として掲げておく。

③ 『雑書』寛文十年（二六七〇）六月二十七日条（同上、九一八頁）

三日町（〓穀町、盛岡市）の久太郎が乱心して放火したといふので、念のため親類ともへ書付を出させたところ、「少も構無之候間、如何様にも被仰付候へ」とのことだったので、成敗することになった。この事例は、久太郎の処分について親類の意向を尋ねていることに注目して掲げてみた。親類が久太郎の命を助けてほしいと願つた場合はど

うなったのか不明ながら、乱心による放火は即死刑というわけではなくなっているように思われる。

④『雑書』元禄三年（一六九〇）九月十日条（五巻、八

二九・三〇頁）

仙台領亘理の釣師村（福島県新地町）甚右衛門子久三郎が田名部（むつ市）へ行く途中、七月九日の晩に花巻（花巻市）の肝煎弥蔵所に宿を取って眠っていたところ、弥蔵が乱心して久三郎に三、四ヶ所の疵を負わせたため入籠となった。久三郎は内外科の治療を受け、疵も平癒してきたこともあり、「弥蔵乱心二候へハ、無是非儀御座候」として、弥蔵を籠舎御免にしてほしいとの口上書を出し、これが認められた。この事例は、殺人ではなく傷害なので、有免願いが認められやすかったのかもしれないが、とにかく被害者による有免願いに一定の効果があつたことは間違いない。

なお、この事例は仙台藩領民を盛岡藩領民が疵付けたのだから、藩と藩にまたがる事件である。したがって、両藩間に何らかの交渉があつたかもしれないが、それについての記述はない。久三郎はもとと田名部の人間で、伊勢へ抜け参りしようとして釣師村で引き留められ、そのまま同村に居着いていたものの、この七月に田名部へ戻ろうとしてこの事件に遭遇したようだから、あまり両藩間の問題にはならなかった可能性もある。

⑤『雑書』元禄五年（一六九二）二月二十五日条（六巻、三八頁）

肴町（盛岡市）久四郎の女房が去る二十二日の晩に夫を疵付け、夫が即死した。これにより女房は入籠となったが、久四郎子の久五郎・五人組・検断から、「右之女房乱心二相究申候間、籠舎御免被成、手前ニて座敷籠二指置申度候、万一座鋪籠破り如何様之儀も仕出申候は」、自分たちにとどのような処罰が加えられても構わない旨の訴状が出され、これが願ひ通り認められた。夫殺しという罪に処されるような重罪だが、加害者の乱心がはつきりしていること、子ども・五人組などの責任をもつとの誓約のうえでの有免願いが認められていることは、乱心者の犯罪に対する盛岡藩の方針をよく示していると思われる。

⑥『雑書』元禄八年（一六九五）三月十一日条（同上、四八四頁）

藤村清左衛門知行所の上飯岡村（盛岡市）の勘四郎が先月二十三日の晩に女房を切り殺し、さらに今月九日の晩には赤林村（矢巾町）住居の聲久之丞をも切り殺した。乱心のため何の意趣もないとのことを、給人の清左衛門と代官二人が一緒に上申し、この報告を受けて、藩は、「病氣にて右之通候得は、從此方御仕置二ハ不被仰付候、清左衛門百性之儀候之間、心次第可仕」と命じた。給人が勘四郎をどう処分したかの記事はない。ここには第三章第一節で

述べた給人の手前仕置権との関係もあるので、単純には断言できないが、病気でないならば藩が勘四郎を仕置するものだと解釈できるので、その場合親類などが宥免願いを出せば、一定の考慮が払われたものと思われる。

⑦ 『雑書』正徳四年（二七一四）六月二十六日条、同五年八月二十七日条（一〇巻、七三四頁、九六〇頁）、『刑事』一〇四頁

これは乱心した武士による殺人の例である。与力の柴内作兵衛が六月二十五日の夜ふと乱心して、自分の女房と三歳の娘を切り殺し、六歳の男子と舅姑にも手疵を負わせて欠落した。しかし、二十六日朝に発見され、柴内作右衛門に預けられた。この事件の結末は一年以上経った正徳五年八月二十七日に示されている。すなわち、作兵衛に「乱心之仕方を以切腹不被 仰付、依之御仕置被 仰付者也」とされた。つまり、預け先の柴内作右衛門宅で打首となつたのである。ただし、死骸は親類に与えられた。この事例では、乱心した武士による殺人・傷害に対する刑罰が切腹ではなく打首という重い刑罰になっており、乱心という要素はほとんど考慮されていないように思われる。舅姑に手疵を負わせたことが重視されたのであろうか。

⑧ 『雑書』享保十三年（二七二八）四月二十八日条（一

三巻、六四四頁）

毛馬内通り万谷村（小坂町）の百姓三八（七十三歳）の婢

養子九八が去る七日に舅の三八の頭を割り殺害した。これを近所の者が聞き付けて駆け付け、九八をからめ捕つて代官へ訴えた。代官が詮議したところ、まったくの乱心によるものと判断され、その旨が藩へ報告されたのち、舅殺しは「畢竟乱心之者之事二候間、十罪なから御用捨を以打首」と申し渡された。この事例は、『文化律』第七九条第一項の先例として掲げられているが、そこではなぜか科せられた刑罰が打首ではなく獄門となっている。

⑨ 『雑書』享保十五年（二七三〇）六月八日条（一四巻、

五〇九頁）

三戸町（『日影門外小路、盛岡市』）の大工七兵衛の妻が乱心し、子どもを切り殺したり疵を負わせたりした件につき、七兵衛から「七兵衛難義仕候付、右妻親類共方へ引とらせ申度」との申し出があり、この願いが認められた。その後この妻が何らかの処罰を受けたのかどうか、はつきりとは分らないが、おそらくそのまま親類の監視下におかれただけではなからうか。だとすると、乱心による自分の子どもの殺害・傷害には宥免願いが認められたことになるう。

⑩ 『雑書』享保十九年（二七三四）六月十四日条（一五

巻、六四五・六頁）

四月二十四日に赤川（盛岡市）の薬種屋の女房がふと乱心して、医師と思われる古木友泉なる者を切り殺した。こ

のため本心になるまで夫又七へ預けられ、快氣したところで死罪に処すよう命じられた。一方、切り殺された友泉は身帯が取り上げられている。その理由としては、「不慮之乍事、由断成致方有之」とだけあり、詳しい事情は分からない。なお、この事例は『文化律』第七九条第二項の先例の一つとして掲げられているが、これがなぜ第二項の先例になるのか理解できない。友泉が乱心して薬種屋女房を切り殺したというのならば理解できるが。

⑪『雑書』明和九年(＝安永元、一七七二)四月十四日、

五月二十九日、六月六日条(二七巻、五八六頁、六一

五・六頁)、『刑事』四三五・六頁、五六九・七〇頁

少し時代を進める。四月十三日に、二駄二人扶持を与えられている鈴木清次郎(十五歳)がふと乱心して、妻に申し合わせた女を切り殺した。詮議したところやはり乱心と認められ、親類預けとなった。これに対して聖壽寺(盛岡市)から、清次郎は「当十五歳にて幼少も同然之年來故、罪科御救免被成下拙僧へ被下置候ハ、直々弟子仕為遂出家、亡妻之追善も為相勤度」いとの有免願いが出され、この願いが認められている。江戸時代の許婚はすでに夫婦に準じた関係にあると考えられたから、ここでも「亡妻之追善」といってもおかしくないのだろう。いずれにせよ、ここでは寺院からの有免願いだが、寺院から有免願いが出される例は決して珍しくない。

五〇

⑫『雑書』寛政七年(二七九五)三月十七日条(三五巻、

五一・三頁)、『刑事』八三九・四〇頁

御持弓の政六が去年十一月二十八日に乱心して妻を切り殺し、子どもにも疵を負わせた。しばらくしてはつと心付き、妻を殺したことをたいへん後悔したが、子どもに疵を負わせたことは覚えておらず、乱心だったと白状した。この事件を受けて、御持弓の者一統が永福寺(盛岡市)へ政六の助命を願い出、妻の親も政六を助命しても少しも遺恨はないと永福寺へ口上書を差し出したので、永福寺より「御助被成下置候ハ、出家仕、妻之菩提とも為吊申度」といとの願いが出され、格別のお慈悲をもって助命し、永福寺へ渡されることになった。

以上、十二件ほどの判例を挙げてみた。近世初期には乱心を特別な事情とはせず、通常人と同様に成敗する例がみられたが、元禄期ぐらいからは乱心を考慮して軽く罰するようになり、さらに親類や同僚・寺院などからの有免願いがあると、刑罰を科すことなく、親類や寺院に預ける例もみられ、この乱心への姿勢が江戸幕府の『公事方御定書』下巻第七八条の規定とほぼ同様だったため、これらを踏まえて『文化律』第七九条を制定するのには、ほとんど無理がなかったのではないかと思われる。

『文化律』制定以後の判例

(743)

次に「文化律」が制定されたあとの乱心に関する判例を
確認しておこう。

⑬ 『刑事』一・一三四・五頁所掲文政四年（二八二）七

月二十六日判決、『事例』六項「乱心」

六月六日に久保田八十八嫡子の友弥が上田堤（うへだつみ）（高松）の池、盛岡市へ行った際、持病が起こつて気分が悪くなり、前後忘却して脇指を抜いて藪と思つた所に切り込んだところ、実際は松尾力弥という者の首を切り落としてしまつた。はつと心付いて驚き、人を殺してしまつてはとても助からないと思ひ、何とか逃げ隠れようとその場を逃げ去つたが、結局捕り押さえられた。詮議の結果、「乱心ニて人を殺、本心ニ立帰候上は逃隠不申、侍道相立可申処無其儀、助命を心掛逃隠候段、侍ニ不似合卑怯至極之致方重疊不届」と判断され、「御大法之通於籠前打首」と申し渡された。この友弥に科せられた籠前において打首という刑罰は、乱心しての殺人に対する刑罰というよりも、乱心して殺人を犯したあとの、本心に立ち帰りながら武士道に反する行動を取つたことに対して科せられたものと考えた方がよさそうである。

⑭ 『事例』六項「乱心」所掲文政九年（二八二）五月

十四日判決

南部弥六郎家来の川野勝弥が去年二月に大迫町（おほせまち）（花巻市）の富田屋丈助という者の所へ駆け込み、居合わせた同町の

善十郎に刃傷に及んだ。「他生之者眼前へ相頭候ト存、打留候心得ニて及刃傷候段、偏ニ乱心之所為」と判断された。善十郎がこの疵のため死んだからには解死人を仰せ付けられるべきところだが、乱心に紛れないので、別段の憐愍をもつて解死人は御免、ほかの重い咎めを申し付ける、しかし、格別目出度い時節なので、一等軽く咎めるよう藩主より弥六郎へ沙汰があり、最終的には勝弥は廢嫡のうえ人元・親類へ預けられ、見守るよう命じられている。この事例では、陪臣の嫡子が乱心のうえ町人を切り殺したものである、文化律「第七九条の第一項と第二項のどちらが適用されたのか迷うところである。しかしいづれにしても下手人は御免となり、さらに赦に浴して非常に軽い処罰になっている。

⑮ 『事例』一項「主親夫殺」所掲嘉永四年（二八五）

十月二十三日判決

厨川通り片原町（かたはらまち）（盛岡市）の権蔵はかねて病氣のところ、去年二月二十三日に狂気したのか、狐と思つて脇差で母を殺害した。このため籠前において打首、小高殺生場において三日獄門に処された。これは、「文化律」第七九条第一項但書の典型的な事例だが、その刑罰は死罪ではなく、打首のうえ三日獄門と一段と重くなっている。しかし、通常人ならば、親殺しは引き廻しのうえ磔だから、乱心が刑を軽くする要素として考えられていたことは間違いないだろ

う。

乱心と赦

以上、乱心による殺人などの事例を十五件ほど紹介した。近世初期は乱心という要素があまり考慮されなかったようだが、元禄期頃からそれが刑を軽くする要因として少しずつ考慮されるようになり、さらには被害者の関係者による宥免願いも重視され、そして『文化律』制定によって明確に規定されることにより、それが適用されている事例がみられる。

この点では、『文化律』は『公事方御定書』下巻をモデルとして制定されたとよくいわれるが、むしろそれ以前からの盛岡藩の先例を踏まえつつ、無理なく幕府法を導入できた事例といつてよい。しかし、乱心かどうかを正確に判断することは幕末に至っても難しいことだっただろうから、乱心かどうか迷うような場合は、とかく吉凶の赦を利用することで一定の答えを出す方便もあり得たように思われる。

- (1) 高柳真三、『江戸時代の罪と刑罰抄説』(有斐閣、一九八八年)
 「第四 江戸時代の乱心者の刑事責任」(九三頁以下、初出は一九五六年、平松義郎、『近世刑事訴訟法の研究』(創文社、一九六〇年 九八二頁以下、などを参照。

五二

(2) 乱心に限ったことではないが、個々の犯罪に対して個別具体的に柔軟に対応するために赦が利用されたことについて、谷口眞子『幕藩権力による恩赦の構造と特質——近世中後期幕藩を事例に——』(『日本史研究』六〇七号、二〇一三年)などを参照。

第二節 幼年者は数え十五歳未満

『文化律』の条文

『文化律』第八〇条「十五歳以下之者御仕置之事」は、

一 子心にて無弁人を殺候者 十五歳迄親類え預置永

籠

一同火附候者 同断

一 盜致候者 大人御仕置より一等軽く可申付

一 十五歳以下無宿者、途中其外にて小盜致候二おゐて

ハ 小屋頭手下

の四つの項から成り立っている。これは江戸幕府の『公事方御定書』下巻第七九条「拾五歳以下之者御仕置之事」を引き写したもので、ただ、盛岡藩には遠島(『島流し』)という刑がなかったため、幕府が第一、二項の罪を遠島としたのを永籠に変え、第四項の非人手下を小屋頭手下に変えただけで、趣旨は同じである。

したがって、江戸幕府も盛岡藩も、数え十五歳未満の者の犯罪については大人より軽く罰することにして、第一項は大人ならば下手人という死刑になるところを遠島もしくは

(741)

は永籠、第二項は火罪（「火あぶり」となるところを遠島もしくは永籠、第三項は盗みの刑罰については大人より一段軽くすること、第四項は大人ならば敵き刑になるところを非人手下もしくは小屋頭手下としている。

『文化律』制定以前の判例

それでは、盛岡藩が十五歳未満の者の犯罪を軽く罰するようにしたのは、幕府にならって『文化律』を制定した文化五・六年（一八〇八・九年）からかというところ、決してそうではない。それを示す判例を少し掲げよう。

- ① 『雑書』明暦四年（「万治元、一六五八」）三月二十六日条（二巻、八九頁）

足沢兵部が召し使っていた十四、五歳の下女が、十四、五日以前に兵部の藏へ火を付けたので詮議したところ、火を付けたという心になつて、このようになったといったようである。藩主に報告したところ、いたずら者であるから成敗するようにと申し渡された。十四、五歳の下女なので幼年者といえるが、この事例は死刑に処されている。ちなみに、第二章第三節で指摘した通り、盛岡藩では放火犯を火罪に処することはほとんどなく、成敗・獄門・磔などが科されたので、放火への処罰としては軽いかもしれない。

- ② 『雑書』寛文三年（一六六三）二月二十六日条（同上、三三四頁）

谷村惣兵衛が闇討ちに遭ったとき、供をしていながら惣兵衛を捨てて逃げた若党二人が成敗となった一方、「其時ノさうり取ハ幼少之儀ニ候故御免」として親類方へ返されている。草履取りは必ずしも戦闘員とはいえないことも考慮されたのかもしれないが、この事例では御免の理由として幼少が挙げられている点に注目しておきたい。

- ③ 『雑書』延宝七年（一六七九）二月二十三日条（四巻、二八三・四頁）

この正月八・十日に、赤林村（矢巾町）の肝煎久藏の下人どもが大滝のお留め山へ入り込んで薪を剪った件について、久藏とその子久助及び下人十五人が入籠のうえ詮議され、久藏は事情を一切知らなかったとして放免され、下人十五人のうち頭人二人が成敗となったほか、十三人は久藏へ返された。子の久助は、下人と一緒に山へ参って薪を剪り、山守どもと口論した罪で本来は成敗となるところだが、「若背者ニ候故科金卅兩被仰付、死罪御免」となった。この事例の久助は単に若輩者とされるだけで何歳なのかわからないが、年齢が若いことが考慮されて、科金で死罪を免れていることは確かである。

- ④ 『雑書』元禄九年（一六九六）三月二十八日条（六巻、六八八頁）

与力松岡庄九郎の召仕岩藏がこの十日に篠木村（滝沢市）の助次郎の所から取り逃げし、十一日に捕らえられて、盗

んだ品々は助次郎へ返された。この罪に対して「岩藏儀當年十五歳ニ罷成候付、他領へ御追放迄ハ有之間敷候故、所追放ニ申付」とされた。この事例では、十五歳では大人並みの刑罰を科すことができないという意識が明瞭に表れている。この点は次の事例で一層はつきりする。

⑤ 『雜書』宝永四年(一七〇七)七月十九日条(九卷、

一二八頁)、『刑事』八四・五頁

沼宮内通り堀切村(八幡平市)の源右衛門に先年無調法があつて追放を仰せ付けられ、「次男弥之助其節幼少に付、十五、六にも成候は他領追放被仰候」として、これまで平館村(同)の伯父に預けられていたが、十六歳になったので、今日他領追放を仰せ付けられた。他領追放について、大人並みの処罰を加えられるのは十五、六歳からだというのが明瞭に表れているが、それでも十五歳か十六歳かは、まだ確定していないようである。また、他領追放以外の刑罰についてはどうだったのかも必ずしも明らかではない。

⑥ 『雜書』享保十九年(一七三四)十二月二十三日条

(二五卷、七四七頁)、『刑事』一三九頁

沼宮内通り久保村(岩手町)の左兵衛子の斉藤(十二歳)が十月二十七日に寺田村(八幡平市)の刳札へ疵を付けたことが判明し、きつと処罰されるべきところだが、その行為は「(刳札が)御大切之物と申訳も不存、何之無弁も徒ニ

疵付候段白状仕、至極無調法ニ付、急度可被仰付候得共、幼少者之義故、御用捨を以村御追放」にすると申し渡されている。十二歳で「何之無弁も」という文言は、「公事方御定書」下巻や「文化律」に使われている文言とほぼ同様だから、幼年者の責任を大人並みには扱わないという思想が表れているといえる。

⑦ 『雜書』寛保二年(一七四二)五月十四日条(二八卷、

九六頁)

当正月に徒目付工藤嘉平次が大沢川原(盛岡市)で捕らえた長町(同)作十郎子三九郎は、所々で硯を盗んだことを白状した。幼少なので用捨して沢内(西和賀町)へ追放と申し渡された。この事例は、「文化律」第八〇条第三項の先例として掲げられているものである。沢内は遠追放の場所の一つで、大人ならば下手人となることを、一等軽く罰せられたことを示す事例である。

⑧ 律八〇条所掲明和五年(一七六八)十二月二十一日

判決

『雜書』や『刑事』には、この判決を発見できなかったが、「文化律」第八〇条第三項の先例の一つとして掲げられているもので、出来心で古着類などを盗んだ小女を死罪を赦して牛瀧(佐井村)へ追放とした例である。「文化律」第一一三条「御仕置仕方之事」によると、田名部牛瀧への追放は「重き追放」とされていて、田名部(むつ市)に送

られる遠追放より一段重い処罰である。

⑨『雑書』安永二年（一七七三）九月二日条（三八卷、

一二九頁）

寺町横丁（盛岡市）金八子喜之助は七歳の頃郡山（紫波町）長閑寺の弟子になったが、ひどく折檻されていたたまため、その後所々の寺を経て永野村西来院（遠野市）へたどり着いたが、ここでも折檻に遭って飛び出し、家へ帰っても母親から西来院へ戻るように説得を受け、それでもできずに結局あちこち流浪し、食べ物を手に入れるためについに盗みを働くようになり、そのため七月八日に捕り押さえられた。判決では、その行為は大胆至極の無調法とされ、が、「十五歳未満之者にて後難之弁も無之」く、食べ物を手に入れるためふと盗み心を起こしたものであるから、お慈悲をもつて田名部牛瀧へ追放と申し渡された。この事例は『文化律』第八〇条第四項の先例として掲げられているが、第四項の刑罰は小屋頭手下なのに、この先例は牛瀧へ追放なので、第四項の先例としてはふさわしいものではない。なぜこのような先例が掲げられたのか不明ながら、たぶん第四項に適合的な先例がなかったのではないか。

というのは、そもそも『文化律』制定までの盛岡藩には「小屋頭手下」という刑罰がなかったと思われる。「小屋頭」というのは「乞食小屋の頭」の意味で、被差別民の乞食小屋の主である。そして、第三章第八節で詳しく述べた

ように、乞食が罪を犯したときは乞食に渡して処罰させることはあった。同節④で紹介したように、『雑書』寛延三年（一七五〇）三月二日条には、盗みを働いた者が乞食ならば乞食へ渡せ、そうでなければ牢舎せよと命じられ、調べたところ乞食でなかったので牢舎を申し付けたとある。

しかし、被差別民でない町人・百姓を乞食に渡すという事例を、『文化律』制定以前には見出せないようである。この点、さらに調査を続けたいと思うが、「小屋頭手下」という刑罰は、『公事方御定書』下巻の「非人手下」に合わせるため、新たに採用された刑罰と考ええると、それなりに合理的な説明になるように思われる。

なお、「小屋頭手下」という刑罰は、この盗みを働いた十五歳未満の無宿者に対する刑罰としてだけではなく、『文化律』第六五条「男女申合相果候者之事」第二項にみられるように、相對死（心中）をし損なつて生き残つてしまった男女に対しても科せられる刑罰である。そして、そこでも本文と掲げられる先例との間に齟齬がみられるが、この点についての説明は省略する。

⑩『雑書』文化元年（一八〇四）五月二日条（三八卷、

五六〇頁）

これはいささか珍しい事例であるが、籠守久七の孫代吉が囚人の理兵衛へ二度にわたつて煙管を差し入れて代金を貰った。そのため揚がり屋へ入れられていたが、代吉が

「十五歳前之節故、御慈悲を以揚屋入御免被成候条、向後万端相慎可申者也」と申し渡された。のちに説明するが、盛岡藩の籠守は差別を受けた者だったようなので、『文化律』制定後ならば、あるいは「小屋頭手下」に処されたかも知れない。したがって、この事例は、この時点でもなお「小屋頭手下」という刑罰がなかった証拠といえるのではない。

『文化律』制定以後の判例

以上のように、盛岡藩は、『文化律』制定以前のかなり早い時期から、幼少の者の犯罪は弁えもなくなされることがあるから、大人並みに罰するのではなく、それよりも軽く処罰するという姿勢をもっていたことが明らかになった。そこに、同様に十五歳未満の者の犯罪は大人よりも軽く罰するとする幕府「公事方御定書」下巻が入ってきたのだから、それに合わせるのほとんど問題なく、ただ非人手下という幕府の刑罰へ対応して「小屋頭手下」を新設すれば、それで事足りたわけである。それでは、『文化律』制定以後の幼年者の犯罪にかかわる判例として、どのようなものがあるかを紹介しよう。

- ⑪ 『刑事』一一八〇・二頁所掲文政九年（一八二六）十月朔日判決、『事例』一六項「博奕」

四ツ家丁（盛岡市）半右衛門子の半之助は、同町の永太

とともに、長く病氣でいる弥七を見舞いに行き、弥七から退屈しのぎに博奕しようとして誘われて、三人でわずかの博奕をした。これが露頭して、永太は「御城下井御鷹野場住居御構」に処されたが、半之助は幼年者であるからという理由で、「四ツ家丁住居御構」で済んでいる。明らかに永太より軽い処罰である。もつとも、博奕を勧めた弥七は「過料銭御取上、戸メ」で、半之助よりもさらに軽いように思われる。これが一体どうしてなのか、よく分からない。

- ⑫ 『事例』四項「盗賊之類」所掲天保九年（一八三八）

九月二十九日判決

馬町（盛岡市）出生無宿の平助は七月二十八日に嶋盛浦五郎宅に忍び入って品々を盗み取り、そのうえ取り調べの際偽りをいい、また津志田村（同）重吉へ申し掛けをした罪で死罪となるべきところ、「幼年二付田名部え御追放」になっている。『文化律』第八〇条第三項通りである。

- ⑬ 『事例』二項「火附之類」所掲天保十三年（一八四

二）九月十三日判決

奥寺藤作の下女「きく」は、七月十九日の朝に火を焚き付けたとき、火災が強くなったので消そうと思って、焼き付いた木を取り除いてもったままでいたところ、眠くなって何心なく常居の天井へ投げ捨てたようである。この行為は「幼年と乍申、火ハ大切ニ致ものと申事ハ弁ひ管之所、

相巧候筋ニハ無之候得共、不軽無調法」とされて、田名部へ追放となった。これは意識的に放火したわけでないから、第二項の永籠ではなく、田名部への追放となったのであろう。大人よりも軽く処罰された例といえる。

老年者

近世後期に作られたと思われる仙台藩（伊達家）の「格書抜」という法律書の第九条は「七拾歳已上・拾五歳已下之者、御仕置并拷問之事」と題して、第一項で七十歳以上・十五歳以下の者の犯罪は、その罪を吟味して一等ずつ軽くすること、第二項で人殺しなど死罪に当たるものは格別、その他の犯罪について拷問をしてはいけない、と規定している。つまり、十五歳未満の幼年者を大人より軽く罰する点では盛岡藩と同じだが、違っているのは、七十歳以上の者を十五歳未満の者と同じに扱うことを明記している点である。

現在の七十歳といえは、まだまだ元気な人が多く、現役として縦横に活躍している人も多くいる。しかし、江戸時代には、六十歳ともなるともう老人で、七十歳ともなれば長寿に数えられたのだろう。そこで、仙台藩は、七十歳以上の老年者は十五歳未満の幼年者と同じと考えて、刑罰を少し軽くしたのである。しかし、江戸幕府の「公事方御定書」下巻七九条は、老年者については何も規定していない

ので、⁽³⁾これを引き写した盛岡藩「文化律」第八〇条も、老年者に触れていない。盛岡藩では老年者は一体どのように扱われたのだろうか。仙台藩と同じく幼年者と同様に扱われることはなかったのか。

残念ながら、この点についてはよく分らない。「雑書」天明元年（一七八二）七月朔日条（三〇巻、六五〇頁）に、葛巻善左衛門知行所にある山の売買を阻止しようとして、善左衛門弟などに抵抗した同人百姓弥助が、本来は死罪のところ「七十余歳罷成格別高年之者」なので、お慈悲をもつて永籠に処されている例があるので、何らかの配慮が加えられたのではないかとも思うが、詳細は不明である。これからの宿題にしておきたい。

(1) 高柳真三「江戸時代の罪と刑罰抄説」（有斐閣、一九八八年）「第三 江戸時代の幼年者の刑事責任」（六三頁以下、初出は一九四一年）参照。

(2) 吉田正志「仙台藩の罪と罰」（慈学社出版、二〇一三年）「二 責任能力のはなし」（二八二―四頁）参照。

(3) 「諸例撰要」巻之七、四号（石井良助・服藤弘司編「問答集」3（工藤祐重担当、創文社、一九九九年）五六頁）の、七十四才の平兵衛が少額のめくりカルタをした罪で、先例の通り五十歳以上の刑を申し付けたことにつき、七十才以上の者には仕置の差別があるかとの文化十一戌年十一月十一日の問い合わせに対し、江戸の町奉行が「七十才以上之者二ても、歳之刑差別無之候」と回答している。この点からすると、幕府では、老年者に幼年者と同様の

配慮を加えることはなかったのではないかと。

第三節 飢饉時の盗み

幕府法との関係

盛岡藩に犯罪統計があったのかどうか知らないが、犯罪のうちで一番多かったのは盗みであることは、まず確かであろう。現在の盗みは大きく分けて強盗と窃盗だが、これをさらに細分化すると非常に多くの種類になるだろう。例えば、強盗でも一人によるのか複数人によるのか、刃物をもつてかバットをもつてか、など千差万別である。窃盗も同様で、外にあったものを持ち逃げしたのか他人の家に忍び入ったのか、畑から取ったのか店先から取ったのか等々、具体的な盗みの形態をすべて並べることはとうてい不可能である。そのため、現在の刑法では、第二三五条で「他人の財物を窃取した者は、窃盗の罪とし、十年以下の懲役又は五十万円以下の罰金に処する」、第二三六条第一項で「暴行又は脅迫を用いて他人の財物を強取した者は、強盗の罪とし、五年以上の有期懲役に処する」とごく本質的なことのみを規定して、具体的な態様は書かれていない。

盛岡藩の盗みについての刑法である『文化律』第六七条「盗人御仕置之事」をみると、例えば、刃物をもつて盗みを働いた場合、橋の欄干の金物を取った場合、風呂屋での

五八

盗みなど、少し細かい所まで条文に書かれていて、現在の刑法とは趣を異にするが、そのほとんどは江戸幕府の『公事方御定書』下巻第五六条「盗人御仕置之事」を引き写したものである。

しかし、幕府が盗みに対して多く用いた入れ墨と敲きという刑罰を盛岡藩は採用せず、その代わりに追放刑を用いたことが、同藩刑法の特徴となるだろう。だが、この点も含めて、ここで盛岡藩法と幕府法の比較を詳細に論じることとはとうていできないし、またその必要もないだろう。そこで盛岡藩法の注目すべきこととして、飢饉時の盗みには比較的寛大な態度でもって臨んだことがあるので、この点に焦点を絞って解説を加えよう。

窃盗重罪観と窃盗軽罪観

この飢饉時の盗みには比較的寛大な態度で臨んだということは、実はすでに中世にもみられたことで、とりたてて盛岡藩独自の態度ということではない。^①つまり、民間では、飢饉のときはみんなが飢えているのだから、自分だけ助かるうと思つて盗みを働くことは許せないと決めつけて、相当激しいリンチが行われて、時にはわずかな盗みを働いただけでその者を殺してしまうなどの事件もあったらしい。

これに対して領主の方は、このような過酷な制裁を防止

(735)

するために、飢饉時の小盗は生きるためにやむを得ずしたことだからと、むしろ軽く罰するようにしたというのである。すなわち、民間の「窃盗重罪観」に領主の「窃盗軽罪観」が対置されたわけである。この領主の窃盗軽罪観を前提として、それでは飢饉が非常に多かった盛岡藩では、それが具体的にどのようなように示されているかをみていこう。

近世前期の事例

盛岡藩では、窃盗軽罪観に立つたと思われる判例がすでに近世前期にみられる。その事例を二つ掲げよう。

①『雑書』延宝九年（＝天和元、一六八二）六月朔日条

（四巻、六四〇頁）

七戸通り倉内村（六ヶ所村）の与作名子小次郎は生活が苦しく、女房へ暇を出し、女子二人は望む人に与え、本人は流浪していたところ、五月二十四日の夜に五戸通り大坂村（十和田市）の三右衛門所へ忍び入り、あまりにも飢えていたので食べ物盗もうとして捕縛された。代官が詮議し、七戸（七戸町）に身柄を移して口上書を盛岡まで送って、その判断を仰ぐことになった。老中（＝家老）が相談した結果、「当年ハ下々甚及困窮候付、ケ様之儀ハ可有之儀候、尤、盗人ニハ候得共居所も無之、乞食同然之者候間命助候」として、津軽領へ追放し立ち帰ってはならないと命じるようにと、七戸へ申し送られた。

②『雑書』元禄十三年（一七〇〇）五月三日条（七巻、

四〇〇頁）

厨川通り鵜飼村（滝沢市）の権六召仕彦四郎は、四月六日に欠落して、二十六日の晩に同村九郎右衛門水吞藤十郎所へ盗みに入り捕縛された。詮議したところ、渴命に及んだ盗みだったことが判明したため牢舎を赦免し、甥など親類三人に預けて介抱させることになった。

以上二例のみだが、飢饉時の小盗に対しては同情の余地があるとの判断が藩役人に抱かれていたらしいことが窺われる。もちろん、この判断はおそらく個別具体的事情を考慮したもので、何らかの一般的な規定が作られていたとは思われないが、「仁政」を示すことが領主には求められていた。

宝暦飢饉時の事例

盛岡藩は宝暦五年（一七五五）に冷夏による大飢饉に見舞われる。その損害は、本田十万石のうち七万七千石余、新田十五万石のうち十二万石余という状態で、十月中旬から飢え人が始まる。十二月に入ると餓死人も生じるようになった。さらに翌宝暦六年も凶作で、兩年の餓死者は十万人ほどであろうといわれている。以下、この時期の盗みの判例を紹介することにするが、関係判例はだいたい数が多いため、その典型的なものを掲げるに止める。

③ 『雑書』宝暦六年(一七五六)五月二十七日条(二三

卷、五〇二・三頁)

上田通り見石村(東中野村、盛岡市)の長吉は去年九月十四日に上小路(同)の喜作の畑に忍び込み、大根二本を盗み取ったところを捕り押さえられた。去年秋に手作大根が不作だったためふと盗み取ったものである。捕縛された際、逃げるため鎌を振り回して喜作へ疵を負わせもした。この事件を詮議した役人は、「取候品軽く、兼て盜候心得ニも無之由申上候得共」、断りなく大根二本を取り、かつ喜作へ疵を負わせたのは無調法だとしながらも、ご憐愍をもつて御城下并御鷹野場御追放を申し渡した。確かに大根二本は小盗だが、畑主を疵付けていることを勘案すると御城下并御鷹野場御追放は軽い処罰といえようか。

この事件が生じた直後になるが、『雑書』宝暦五年九月二十五日条(同上、二三三頁)、『藩法』上、一八六頁によれば、次のような法令が諸士・諸医に触れられ、また代官にも通達されている。

一頃日端々近在におめて畑物を盜取候付、畑主見答候得は却て畑主を打擲致疵を付、切殺可申体相働候段訴出候、不法之仕方強盜之至候、依之銘々吟味方之心得も可有之事ニ候条、無由断用心可申付候、向後共ニ右体之者有之におめてハ、急度可被 仰付候、

(中略)

六〇

一御城下ニおめて畑物等持賦候儀は、朝六ツ時(＝午前六時)より暮六ツ時(＝午後六時)迄之内致通用、夜中ハ通用之義可為無用旨、先達被 仰出、被 仰出之通弥可相心得候、(後略)

これは城下近郊を対象とした法令のようだが、不作を原因とした盗みが多発したことに対する防止策を述べた法令である。『雑書』延宝三年(一六七五)六月二十九日条(三卷、六二六頁)によれば、毛馬内代官所管内(鹿角市)で穂物の盜難が頻発しているとして、暮六ツ以降は作物を持ち運ぶなど命じた高札が立てられているが、同年七月十二日(同上、六三四・五頁)にはこの方針が全藩領域に広げて命じられているので、おそらく凶作時には領内各地で小盜が頻発し、夜間の作物持ち運びが禁止されることが多かったであろう。

④ 『雑書』宝暦七年(一七五七)三月十八日条(二四卷、四二頁)

無宿松之助は去年十一月十八日の夜に、夕顔瀬惣門外(盛岡市)を戸板二枚を背負って通った際、それを怪しいとにらんだ番人に捕り押さえられた。詮議したところ、頼れる親類もなく所々勧進していたけれども、一銭の貯えもなくまったく腹が空いたため、何かを売り払って食い物を求め命を繋ごうと思って、三ツ家町(同)で戸板二枚を盗み取ったと白状した。「盜仕候者ハ御仕置之被成方も有之候

(733)

得共、畢竟命助り申度無拠盜取候趣相聞得候間、此所御慈悲之御容赦を以、花輪（鹿角市）へ御追放」と申し渡された。

天明飢饉時の事例

次に天明の大飢饉の際の盗みの事例を掲げよう。

- ⑤ 『雑書』 天明三年（一七八三）八月二十四日条（三一巻、三九七頁）

太田代要助より、昨夜九時（午前零時）過ぎに居屋敷へ怪しい者が侵入したので捕り押さえたところ、零石通り上野村（零石町）長右衛門子長吉という者で、どうにも致し方もなく何でも盗み取りたいと家内へ入ったと供述したので、詮議をしてほしい旨願いがあった。この事件については、「但、右御片付、宝暦六年凶作之御類例を以、盛岡五御代官所御構、揚屋入御免」となつたと、御目付留に詳しく記されているとの但書が付されている。宝暦六年の飢饉時の盗みに対する判決が先例として扱われていたことを明瞭に示す事例である。

- ⑥ 『雑書』 天明七年（一七八七）六月十五日条（三三三巻、八五頁）

野田通り上安家村（岩泉町）当時無宿の西松は六年以前に江戸へ出て奉公していたが、去々年二月に暇を取って国許へ帰つたところ、凶年のとき親兄弟が死に絶え、田地も

人手に渡り、もはや飢え死にしそうなので、奉公先でもあらうかと八戸（八戸市）へ行こうとしていたものの、去年八月に空腹になつて葛巻村（葛巻町）の百姓家へ忍び入り、土蔵から銭や衣類を盗み取ったことを白状した。この事件の判決は、「御大法之通、重き御仕置可被 仰付無調法者ニ候得共、年柄之事ニも候条、格別之御慈悲を以田名部（むつ市）へ御追放」というものであった。本来なら死刑であるが、それを減輕して追放刑に処したのである。

天保飢饉時の方針転換

次の大飢饉は天保期だが、天保五年（一八三四）十月二十一日に町奉行・目付の連名で次の重要な伺いが提出されている（『藩法』下、六二・三頁）。

一 盗人御仕置之儀、近年自然緩宥ニ相成、欠落立帰候上、所え忍入盗仕候ものも、死罪ニ不被仰付候様ニ相見得候ニ付、前々御例遂吟味候所、宝暦五年・天明三年凶作翌年之頃、盗人多く有之候所、及渴命候ニ付、不得止事盗仕趣意ヲ以、御宥被成候義多分御座候、右両年前後之御例ニハ、至て輕品盜取候歟、出来心ニて盗仕候者、御追放被仰付候義相見得候得共、欠落立帰之上、人家へ忍入盗仕候者ハ勿論、人家へ忍入盗仕候一通之者ニても、死罪被仰付候御振合ニ相見得申候、依之仮令近き御例御座候得共、已

来格別輕き御片付ニ相成例ニハ基き不申、評詁仕申上候ては、如何可有御座哉、此段奉伺候、

但、近年別て盜仕候者多く相見得候之様ニ御座候付、近例之輕き御片付ニ寄候ては、後々至自然と前々の御例ニ流儀様ニ相成、御示も薄く可有御座哉と奉存候、依之本文之通相談申上候、

本文では、たとえ飢饉時であっても、以前欠落してそれから立ち帰ったうえで盗みをした場合は、軽く処罰するのは止めるべきだということが提案されているようだが、但書を含めて解釈すると、要するに飢饉時を理由に盗犯を軽く処罰するのは止めた方がいいとの提言である。そして、この伺いに対して藩は伺いの通りと回答している。確かに天保飢饉時の盗みに関する判例を調べても、飢饉時だからという理由で処罰を減輕した事例をほとんど発見できないようである。

問題は、一体なぜこのような方針転換が行われたのかである。その理由を教えてください。史料は見出せないが、わたしは、やはり『文化律』の制定が大きな意味をもったのではないかと推測する。つまり、上記伺い中の「死罪被仰付候御振合」というのは、『文化律』第六七条第一二項の十両以上の金品を盗んだ者は死罪などの死刑規定を指すのではないかと思う。

この飢饉時の盗みを軽く罰するか否かという問題は、大

局的にみれば、法的安定性を重視するか、それとも具体的妥当性を追求するかという問題に関係するだろう。個々の事情を一切考慮せず、『文化律』の規定をいつでもそのまま適用すれば処罰の程度が安定する。一方「御慈悲を以て飢饉時の盗みを減輕するのは、その時々事情を考慮して、そのような事情のあるときには軽い盗みをして仕方がない」と判断するものである。このどちらの考え方も成り立つわけで、どちらを取るかは人によって異なるであろう。そして、天明の飢饉までの盛岡藩は具体的妥当性を追求することこそ「仁政」だとしてきたが、天保の飢饉では法的安定性を重視することこそ「仁政」だと判断したことになる。わたしは、上記史料を以上のように理解するが、いかがであろうか。

(1) 笠松宏至「盗み」(網野善彦他『中世の罪と罰』(東京大学出版会、一九八三年) 参照。

(2) ちなみに、稲を盗刈りした者に対する八戸藩元禄十六年八月二十六日判決中に「年柄之儀ニて及渴命左様之徒をも仕候ハ、御用捨可有之候」という文言のあることが紹介されている(工藤祐直「八戸藩刑法——法例を中心に——」(V)『八戸工業高等専門学校紀要』一八号、一九八三年) 七頁。

(3) 細井計「盛岡藩宝暦の飢饉とその史料」(東洋書院、二〇一年) 参照。

第四節 内済の可否

民事内済

「内済」とは内々に済ますことで、さまざまな争いを表沙汰にすることなく、当事者同士の話し合いで解決することである。これは現在でも行われることであり、江戸時代にも当然あった。むしろ江戸時代には、民事的な紛争、なかでも金の貸し借りなどの争いについては、できるだけ裁判に持ち込むようなことはせず、まずはお互いが話し合つて解決することが求められた。どうしても当事者同士の話し合いがまとまらなければ、そのときはお上（おさま）が恩恵として裁判で決めてやるというのが江戸幕府や大名の態度だった。

この内済にはもちろんメリットがある。裁判にならないで解決するのだから、金も時間も節約できる。とくに他領民との争いになると、その裁判は江戸の奉行所で行われるのが原則だったから、当事者は江戸まで出ていかなければならなかった。膨大な金と時間がかかった。これを避けられるのだから大きなメリットになる。

しかし、一方でデメリットの場合もあり得る。同等の者同士の話し合いならいいだろうが、力の強い者と弱い者との話し合いでは、どうしても強い者の主張が通りやすくなる。例えば、金を貸した町人と借金した武士とでは、時

とすると町人の道理が引つ込んで武士の無理が通ることもある。盛岡藩の大河内貞は、寛政期（一七八九—一八〇〇）に著した『たとへは』全、二四五頁で、「当時の内済は理を非に曲でも取鎮め候事を内済と存候、内済とは表立す取鎮候へ共、理は理、非は非、表立候も同然に正しく致候事にて、平民の理を非とし、士の非を理といたし候て内済と申候は、国に政なきと可申候、御仁政には内済は不入事にて候」と述べている。きわめて強烈な内済批判である。以上のような民事的な紛争にかかわる内済をどう評価するかもたいへん興味深い問題であるが、ここでは以上の指摘に止めて、これからは主として刑事内済についてみておくことにする。

刑事内済

『文化律』第一〇条「出入扱願不取上品并扱日限之事」第一項は、火附・盜賊・人殺・人勾引・逆罪之者・名主等私曲非分・博奕・三笠附・取退無尽・隠遊女・巧事の十一の犯罪については、出入扱い（内済）を願つても、それを許さないとするとともに、この外にも上へ関係する出入の内済は願ひ出ても許さないとしている。この規定は、幕府『公事方御定書』下巻第一五条「出入扱願不取上品并扱日限之事」と同文（ただし、博奕・三笠附・取退無尽をまとめて一つ）で、明らかに幕府法にならつたものである。そして

その趣旨は、この十一の犯罪はもちろんのこと、そのほかのお上に関係する紛争の内済は許さないというものである。

したがって、この十一の犯罪以外ならば内済が許されることになる。例えば、夫ある妻が夫以外の男(「間男」と関係する密通は、表沙汰になれば死罪に処されるほどの犯罪であるが、間男が夫に金を渡すなどして内済が成立すれば、それ以上刑罰を加えられることはない。このような刑罰を回避するための内済を「刑事内済」と呼ぶ。しかし、このような刑事内済禁止の法が存在は、逆にいうと、禁止されているにもかかわらず刑事内済をしようとする当事者の動きがあったことを示す。以下、盛岡藩では犯罪をめぐってどのような内済の動きがあり、それがどのようにに処理されたか、その事例を具体的に探ってみよう。

武士の内済

① 『雑書』元禄三年(一六九〇)六月四日条(五巻、七九一頁、『刑事』四五・六頁、二四三・四頁)

四月二十日、花巻給人の高橋儀右衛門が同じく花巻給人の中嶋勘右衛門から悪口をいわれた意趣で勘右衛門宅へ乗り込み、討ち果たすと刀を抜き少し負傷させたが、居合わせた花巻給人十二、三人が仲裁に入り、双方をなだめて和談させた。しかし、儀右衛門の意趣は晴れず、二十一日の

夜儀右衛門が自害した。藩役人よりことの経緯が詳細に取り調べられたうえ、藩主に上申され、勘右衛門は切腹を命じられた。その理由は、「縦引切疵にても手を負候上ハ一分立間布処、任籌策候儀、侍に不似合心底」だということである。籌策というのははかり事という意味のようで、ここでは喧嘩を表沙汰にしないで内済に図ったということであろう。つまり、儀右衛門の自害は結果として勘右衛門の切腹をもたらししているわけで、これは意趣を含んだ儀右衛門の死骸が勘右衛門の切腹を要求しているという、当時の人々の死骸のもつ威力をも示すものである。

確かに、天文五年(一五三六)制定の伊達家の分国法である『塵芥集』第三四条には、「自害の事、題目を申をき死に候はゞ、遺言の敵、成敗を加ふべきなり」とある。敵を討ってくれと遺言して自害したならば、その敵を成敗するというのが、まさに上記の事例である。十六世紀半ばの伊達家の法と同じような法が、十七世紀末の盛岡藩にも生きていたのかもしれない。同時に、疵を負わせられながらその場で反撃せず、仲間の取りなしとはいえ和談に応じたのは侍に似合わない仕方、武士の一分が立たないはずだとの藩主からの申し渡しは、侍たる者の行動規範の一端をよく表している。

② 『覚書』慶応三年(一八六七)五月十二日条(慶応編、七六九・七〇頁)

一方、まったくみともない武士の内済もある。乗り役喜六の伴沢田幸輔が昨年七月四日の夜に熟酔して殺丁（盛岡市）喜兵衛の召仕女に戯れたことから、喜兵衛と取っ組み合いになって疵を負わせ、これについて内済を頼み込んだことが不埒至極とされて「伴二御立不被成もの也」との申し渡しを受けている。伴に立てないという処分はあまり聞きなれないが、親の相続人にはなれない、つまりは娘と同様の立場にすることかと思われる。確かに、酔って女に戯れその主人と取っ組み合って負傷させ、それを内済で収めようなどというのは、①の儀右衛門の武士としての姿勢とだいぶ違いがある。

町の内済

③『雑書』明和九年（＝安永元、一七七二）六月八日条（二七巻、六一七頁）

去る四日に、浅岸村（盛岡市）菊松という春木（＝薪）売りが八幡丁（同）中の石橋辺で春木の荷を下ろしたときに馬の足に当たり、馬が驚いて駆け出して同丁の久太（七十八歳）を踏みつけたため、久太はその夜に死亡した。この事件につき町奉行より、双方誤りから生じた事故なので内済させたいとの申し出があった。この事件について当事者双方がどう対応したのか、またこの町奉行の申し出がどのような結果になったのかは不明ながら、おそらく何らかの

条件下で内済が成立したのだろう。死亡事故ではあるが、荷が馬に当たったのは単純な過失で、しかも馬に踏まれての死亡という事故内容でもあるからだろうか、ここでは町奉行が積極的に内済させようとしていることが注目される。

村の内済

④『雑書』寛政二年（一七九〇）六月二十七日条（三四巻、一二三・四頁）、『刑事』七八二・四頁

田鍬村（宮古市）で去年九月二十一日夜に、田鍬村の太兵衛が老木村（同）の政之丞によって切り殺される事件が生じた。田鍬村の佐野右衛門が、この事件を代官に訴えては村の騒動になるから内済したいと発言し、同村の肝煎・老名・被害者の妻子・親類・組合と加害者の親兄弟・仮肝煎などが相談のうえ、困窮している村方でもあるから内済することに決まり、太兵衛の死骸は華嚴院（宮古市）へ葬られた。これが何らかの次第で藩の知るところとなり、加害者の政之丞はその所で打首となり、さらに内済を提案した佐野右衛門が田名部牛瀧（佐井村）へ追放となったほか、肝煎は役を取り上げて重過料、妻子は所払い、その他の被害者側関係者は過料、加害者側関係者は償みを申し付けられた。

代官へ訴えると村の騒動になるというのが具体的に何な

のか、必ずしも明確ではないが、困窮している村だから事件を表沙汰にしたいくないというのは一応理解可能だろう。

表沙汰にすれば、関係者の取り調べが当然あるから、盛岡まで行かなければならないこともある。これらを避けたいというのは、貧しい村ならば確かにあり得ることである。とくに村役人はこの点を考慮したかもしれない。しかし、結局はことが露頭し、政之丞はその所(田鍬村か老木村だろう)で打首となり、その刑場の設置や番人としての動員など、かえって費用と時間を浪費させられたうえに、肝煎は十貫文、老名は五貫文、親類・組合五人はそれぞれ三貫文の過料銭を科せられている。

⑤ 『刑事』一二二四〜八頁所掲文政十年(二八二七)八月十三日判決、『事例』六項「人殺」

三月八日夜、根反村(二戸町)の孫作が同村の辰に頼んで、同村嘉兵衛の家へ火を付けるため二人で忍び入ったことが露頭し、二人が捕縛された。孫作は親類の孫之丞・三五郎に預けられたが、肝煎名代忠助と目明し太郎助が来て内済を勧めたため、肝煎所へ老名とともに行って頼み込み内済とした。しかし、孫作はかねてからのいたずら者のため、今後どのようなことをしでかすか分からず、困いを拵えることもできないので、この際縊り殺した方がいと孫之丞が提案し、三五郎も同意して、十八日に二人で孫作を殺した。この殺人が発覚したが、孫作は重大な犯罪者だっ

たので、殺害した無調法は深く咎めないと、孫之丞は田名部(むつ市)へ、三五郎は沢内(西和賀町)へ追放となった。

一方、辰は親類の久作と親の左助に預けられたが、左助がいうには、辰は大胆至極のことをしたので片付けてしまいたい、ついては見守っていてくれと久作に頼み込み、久作はそれを止めることもせず、十七日に左助が辰を墓場で縊り殺すのを見届けた。この咎で久作は大迫(花巻市)へ追放となった。実行した左助がどう処罰されたのかは判決が残っていないようだ。

この事件に関係して、根反村御蔵(〓藩直轄領)肝煎が役取り放しのうえ過料銭、給人知行所肝煎一人が過料銭、名代が過料銭、目明しが役取り放しのうえ過料銭、小走り一人・老名五人・孫作組合六人が過料銭を科せられている。このうち、目明しが内済を申し勧めた理由として、「御上へ御苦勞懸上候も恐人、村方ニても迷惑ニ相成」ということが挙げられている。目明しが内済を勧めた真の理由は、何となく孫作や辰との腐れ縁からではないかと思うが、内済を勧められた村方が迷惑を避けたいと思ったことは事実ではないだろうか。

貧窮からの内済

⑥ 『刑事』一三〇〇〜二頁所掲天保四年(二八三三)二

月二十六日判決、『事例』六項「人殺」

浅岸村（盛岡市）の喜助子福松女房「よし」は子どもがなかったので、東中野村（同）の多助三男定（六歳）を去年三月に養子に貰ったが、貧窮で衣類も見苦しく外間も悪いため、先月十九日に外へ出てはだめだといって小縄で結わえておいた。しかし定が抜け出したので、おぶつて帰り、折檻のため家の入り口の戸を明け、板の間へ背中から投げ付けた（あるいは薪で打ったともある）ところ、そのまま死んでしまった。「よし」は、夫福松には誤つて定を取り落とし、立ててあつた新に当たつて死んだと説明したようだが、親類や実父多助には定が病死したことにしておうということになり、喜助や親類を頼んで多助と内済した。しかし、ことが露頭して、「よし」は田名部牛瀧へ追放、福松は村払い、喜助・喜助親類二人・多助は憤みを申し渡されている。なお、実父多助は、「残念ニは存候得共、養子與遺候もの故、無慥存承知致遺候」と供述している。天保四年のことだから凶作の影響も考えられるが、おそらく実家も養家も困窮していたのであろう。実家は口減らしのつもりで定を養子に出し、養子を貰った家もいずれば稼いでくれると思つたのだろう。しかし、衣類が見苦しく外へ遊びに出さず、縄で結わえておいたというのは何とも哀れな話である。

(1) 江戸時代の内済を包括的に論じた研究として、大平祐一「近世日本の訴訟と法」（創文社、二〇一三年）「第二編第三章 内済と裁判」（二七五頁以下、初出は二〇〇五年）がある。

(2) 勝俣鎮夫「死骸敵対」（網野善彦他「中世の罪と罰」（東京大学出版会、一九八三年））、同「中世社会の基層をさぐる」（山川出版社、二〇一一年）「四章 日本人の死骸観念」（二二六―八頁、初出は一九八四年）参照。

(3) 勝俣鎮夫校注「塵芥集」（「中世政治社会思想」上（日本思想大系二一、岩波書店、一九七二年）二一五頁）。

(4) なお、清水克行「室町社会の騷擾と秩序」（吉川弘文館、二〇〇四年）「第一部第二章 中世社会の復讐手段としての自害——復讐の法慣習——」を参照。

第五章 追放刑と身体刑

第一節 場所が指定された追放刑

他領追放の制限

現在の刑罰の主流は、懲役や禁錮といった、その判決を受けた人の自由を剥奪する自由刑である。一方、江戸時代においては、死刑と追放刑が主な刑罰だったといっているだろう。死刑はいうまでもなく命を奪う刑で、追放刑は一定の場所から追放するものである。

この追放刑をめぐる古い時代からの歴史には興味深いものがあるが、ここではそこまで話を広げるのは止め、江戸時代の追放に限つていうと、江戸時代は全国が二百六十前

後の藩に分かれていたから、もともと効果的なのは、厄介者を隣接する他藩の領域に追放することだった。しかし、このように厄介者を他藩領に追放するということは、逆に他藩から自領に厄介者が送り込まれることを意味するから、要するに厄介者を遣つたり取つたりしているだけで、問題の根本的な解決にはならない。

この事態を深刻に考えていたのが八代將軍の徳川吉宗だった。吉宗は、和歌山藩主から將軍になった人で、とくに中国の明律をよく学んでいたらしい。そんな事情もあったのだから、享保七年（一七二二）二月二十二日に、「（前略）件之惡事在之候者領内ニ差置候を嫌ひ、他所へ放遣候儀は有之間敷事ニ候、近年於公儀は追放もの先は無之様に被仰付候間、於国々所々其旨を存、猥ニ追放有之間敷候、然共、喧嘩などにて双方疵付候者か、又は侍など品ニより追放被申付、却て可然趣も可有之候間、其段は格別之事に候」という他領追放制限令を大名宛てに出した。

この幕府の法令が江戸から国許に届けられ、『雑書』によると同年三月三日に、諸役人はこの旨を心得よと家老より命じられている（二巻、三〇六・七頁）。実は江戸幕府自体が幕府領外への追放刑を廃止することができず、その後幕末までそれを利用し続けるが、とにかく原則は他領追放禁止だった。これまでは盛岡藩も犯罪者を秋田（佐竹家）・仙台（伊達家）・弘前（津軽家）などの他領へ追放する

ことがよくあった。しかし、これ以降は他領追放は例外になり、盛岡藩領内での追放が主流となる。

幕府のお構い場所指定方式

この盛岡藩の追放刑についてはすでに故熊林實氏による研究があるので、これに依拠してその特徴を説明するが、その前に江戸幕府の『公事方御定書』下巻第一〇三条「御仕置仕形之事」に規定されている追放刑について解説する。幕府には、遠島刑（＝島流し）があり、これも追放刑の一種といえるが、盛岡藩には遠島がないので、この解説は省く。

幕府の追放刑は、重追放・中追放・軽追放・江戸十里四方追放・江戸払い・所払いの六種である。重追放というのは、武蔵・相模・上野・下野・安房・上総・下総・常陸・山城・摂津・和泉・大和・肥前・東海道筋・木曾路筋・甲斐・駿河のなかに入つてはいけないとするものである。この入つてはいけない地域を「お構い場所」と呼ぶ。また、田畑・家屋敷・家財が没収される（これを闕所という）。

中追放はお構い場所が少し狭くなり、武蔵・山城・摂津・和泉・大和・肥前・東海道筋・木曾路筋・下野・日光道中・甲斐・駿河である。田畑・家屋敷の没収が付く。また軽追放のそれは、江戸十里四方・京・大坂・東海道筋・日光・日光道中である。闕所は同じ。さらに、江戸十里四

方追放というのは、日本橋（中央区）を中心として半径五里以内をお構い場所とし、江戸払いは、品川・板橋・千住・本所・深川・四ツ谷大木戸より内にはいけないとするもので、所払いはその住んでいる村や町をお構い場所とする。

なお、重追放・中追放・軽追放の区別がややこしかったからだろうか、延享二年（一七四五）に改正があり、お構い場所はどれも江戸十里四方・住居の国・悪事をした国となり、ただ重追放が田畑・家屋敷・家財、中追放が田畑・家屋敷、軽追放が田畑の闕所が付くことになった。つまり、お構い場所は同じで、闕所の範囲で区別することになったわけである。

このように幕府の追放刑はどこそこに入つてはいけないという、お構い場所を指定する方式である。逆にいうと、お構い場所以外ならどこにいてもいいということになる。したがって、例えば江戸払いとなった博奕打ちは江戸の周辺にたむろしていればいいので、江戸を除く関東各地に博徒が跋扈することになる。

盛岡藩の追放先指定方式

一方、盛岡藩の『文化律』第一一三条「御仕置仕方之事」に規定されている追放刑は、重き追放・遠追放・中追放・近追放・御城下払い・二十三丁払い・所払いの七種で

ある。

重き追放は、田名部牛瀧（佐井村）への追放と、遠追放の場所へ廻下のまま追放する場合である。遠追放は、両鹿角（鹿角市・沢内（西和賀町）・野田（野田村）・野辺地（野辺地町）・田名部（むつ市）への追放で、中追放は、五戸（五戸町・三戸（三戸町）・七戸（七戸町）・宮古（宮古市）・大槌（大槌町）・五戸市川新田（五戸町）への追放、そして近追放は、雫石（雫石町）・沼宮内（岩手町）・福岡（北上市）・大迫（花巻市）・大更新田（八幡平市）・銅山・御鷹野場が指定されている。ただし、在方の者の追放は罪を犯した場所より遠中近に従つて遠くなるよう取り扱われる。

また、御城下払いは、仙北町升形・神子田枳形・夕顔瀨向枳形で囲われた地域が御城下とされて、これから外に追放する。二十三丁払いは、上田升形よりうちの城下市中から外への追放、所払いは、城下は町人町、在方は居村からの追放である。

このように、重き追放・遠追放・中追放・近追放の四種は、追放先が指定されるもので、これに対して御城下払い・二十三丁払い・所払いの三種はお構い場所指定方式の追放刑ということになる。このお構い場所指定方式の追放に処された者は、そのお構い場所以外ならどこにいてもよかつたから、あちこち城下周辺などをうろついたかもしれない。となると幕府の江戸払いと同様に、例えば津志田

(盛岡市) 通りに厄介者がたむろするなどという問題があったかもしれないが、この通りの事情は不明である。

なお、中追放先として五戸市川新田、近追放先として大更新田と銅山が挙げられているが、この新田や銅山への追放については、幕府の人足寄場や佐渡水替え人足との関係について触れる必要があるので、別に節を立てて解説する。

追放先での処遇

ところで、追放先を指定されての追放は、例えば「沢内へ追放」「雫石へ追放」などと裁判の判決のなかで場所が指定される。同程度の追放刑ならば、その追放先をどこにするかはおそらく裁判役人などが決めたのだろうが、厄介者が送り込まれる追放先にとっては迷惑な話だから、どこに追放するかを決める前に、その候補となる追放先との調整などがあったのかどうか、この通りの事情は興味深いものの、まったく分からない。

ただ、追放者が送られてきたら、その代官所はどう対応したかの一端は分かる。すなわち、『藩法』下、七八三・四頁に収録されている、宮古代官であった金矢光輔が安政三年(一八五〇)に編纂した『御代官心得草』という史料の「御追放者有之節心得方」に、「(前略)支配所え之御追放者来候ハ、検断・目明等之者呼上、玄関ニて被仰渡書

物書ニ申付為談渡、検断え相渡、急度慎罷在へき段申渡可遣候事」とある。つまり、幕府のお構い場所指定方式だと、追放者はお構い場所以外ならどこにいてもいいのだから、監督する者もとくにいなかったと思われるのに対して、追放先指定方式の場合には検断や目明といった追放者を監督する者がいたわけである。彼らが常に追放者を預かったのではなく、熊林氏の研究によると、彼らからさらに第三者に預けられるケースがあったようだが、とにかく最終的には検断ないし目明しが責任をもったことになる。

小林文雄氏は、『雑書』寛政七年(一七九五)三月二十二日条(三五卷、五一五頁)、『刑事』八四〇頁の事例につき、去年三月に毛馬内(鹿角市)へ追放になった新平が毛馬内目明し松之丞所にいたことを指して、「地域社会との接点の全くない場所に追放された犯罪人にとっては、自らの生存を最小限で保障してくれるというメリットもあった」と指摘している。この側面のあったことは確かだろうが、目明しの世話になるということはその一宿一飯の恩義に酬いなければならぬことも意味するから、目明しの実態を考えると、目明しの手先となつて働き、一層悪事に染まる可能性も否定できないのではないだろうか。

なお、追放者を預かった者はその追放者が逃亡しないように監督することも要求された。例えば、『雑書』寛政二

年（一七九〇）五月五日条（三四卷、八三頁）、『刑事』七七頁によれば、追放者の八幡丁（盛岡市）「つき」を五戸で預かつていた五戸新町（五戸町）の小平治が、「つき」が親の病氣を理由に盛岡に帰らせてくれといったのを許し、それが申し分に任せたとして過料銭を取り上げられている。

もちろん、代官も追放者については常に配慮しなければならない。『藩法』上、三三九頁所掲安永四年（一七七五）十二月六日書付には、諸代官に対して、「無調法有之、支配所え御追放被成候者、病死・缺落御訴致延引、或心得違御訴不申上場所も有之、甚不埒之至二候、以来ハ病死・缺落早速訴出可申候、右御訴之外、此末三月・九月一ヶ年兩度、御追放者之有無書上可申候」と命じている。これは、当時いかに追放者の病死・欠落が多かったかを示すものであろう。病死はやむを得ないにしても、欠落の発生は預かり人・肝煎・目明しなどの落ち度であるとともに、その地域の支配を実質的に担っている代官としても、その責任を免れることはできなかったのである。

天保の追放刑改革

『刑事』一四八七―九頁によれば、天保八年（一八三七）二月十三日付けで次のような追放刑改革案が了承されている。

一無調法有之、御追放被 仰付候節、揚屋前并籠前二

て被 仰渡立被遣候処、以来 御城下并五代官所之者ハ、人元并組合之者老入、右御場所え被成御呼出、被 仰渡之節其所え被差置、別紙之通本人并人元・組合之者請書為取調、其趣意熟と為吞込、請書印形仕差上可申事、

一遠在之者無調法有之、於御同所被 仰渡候節、人元并組合御呼出被成候ては迷惑も可致候間、請書為調、本人印形可致候上、其所之御代官え被差遣、人元え組合之内老入御代官呼出、其趣意熟と申含、印形為致請書差出候様可致事、

一御追放場おゐて、以来一ヶ月二一度宛、御代官下役之内、手遠之処ハ長役之者二て、無調法之ヶ条申渡、慎方之教訓いたし、勿論預り候者ハ時々申含、慎方申渡置、尤、不慎之儀有之候歟、惡事致候者於有之は、御吟味之上、急度無調法被 仰付候事、

以下、二ヶ条ほどは脱文のため文意がはつきりしないが、身元の不確かな者を留めおいたり隠しおいたりしてはならないというような内容である。そのうえで、第一・二条にある請書の雛形が左のように載せられている。

差上申証文之事

一私儀、何月何日何之無調法仕候付、御詮議之上何通御代官所え御追放被 仰付、奉畏候、本所并外御代官処え立入、徘徊仕候ハ、私は不及申、加判之者

共迄如何様之曲事ニも可被 仰付候、為後日仍て如件、

年号月日

何通何村本人

誰印

人元

誰印

五人組惣名代

誰印

また、追放者が欠落したときは捕り押さへよ、もし見逃したりしたら必ず処罰すると申し渡すとともに、在々の目明しへは城下の目明しからその都度連絡するので、吟味して捕り押さへるようによせよ、ともいつている。

以上がこの改革の内容だが、これは、追放者が追放先を欠落して本所へ立ち帰る事件が頻発していたため、それを防止するために取り締まりを強化しようとしたもので、本所の人元・五人組の責任を強く自覚させると同時に、追放先での欠落防止と召し捕り方を指示したものである。とくに在方の目明しの働きが期待されている。この改革が、幕末期の時期においてはたしてどの程度実行され、また効果を上げたかは、改めて検討しなければならないが、盛岡藩の追放先指定方式による追放刑は、幕府のお構い場所指定方式によるそれとは、また別の困難を抱えていたといえよう。

なお、第一・二条にあるように、追放刑の判決申し渡しは揚がり屋前や牢前に徒目付^{ちめつけ}が出張して、そこで申し渡す。死刑判決も同様である。しかし、江戸の町奉行所で

は、庶民に死刑判決を申し渡すのはやはり牢屋敷においてであるが、追放刑の判決申し渡し場所は奉行所の法廷である白洲である。些細な点だが、これが盛岡藩と幕府との違いの一つである。ただし、幕府でも追放刑の判決を受けた者には、判決内容を誠実に守りますという誓約書——これを落着請証文と呼ぶ——を提出させており、上記の盛岡藩の請書は、この幕府の制にならったものかもしれない。

(1) 高柳真三・石井良助編『御触書寛保集成』(岩波書店、一九三四年)二五〇九号(一一七六頁)。

(2) 小林文雄「近世中後期における芸能興行と売薬渡世」(久留島浩・吉田伸之編『近世の社会的権力——権威とヘゲモニー——』(山川出版社、一九九六年)二二二頁)。

第二節 新田・鉾山への追放刑

新田への追放方針

前節で追放刑について述べた際、中追放先に五戸市川新田^{ごのへいちかしん}(五戸町)、近追放先に大更新田^{おほまげしん}(八幡平市)と銅山が指定されていると紹介した。ここでは、この新田と銅山への追放がどのような意味をもったのかについて、幕府の人足寄場及び佐渡水替え人足との比較を通して、少し考えてみたいと思う。

盛岡藩が犯罪者を新田開発に利用しようとしたのはだい

ぶ早く、『雑書』寛文八年（二六六八）六月二十四日条（二卷、六五八頁）に次の法令が掲載されている。

一 御領分中御蔵入・御給所方百姓、或ハ年具・役等未進有之候て、金地米銭脇借過分ニ有之、走候百姓、其外軽罪之者成共、和賀・稗貫郡之内、其方見立之新田所へ帰参候者、其科を免、有付為被可被申候也、

つまり、和賀郡・稗貫郡のうちで新田開発をしたいと望む給人がいたら、年貢などを納められずに逃亡した百姓や軽罪を犯した者であっても、その新田に戻ってきたならば、その罪を免じて新田開発に従事させよという内容である。ここでは、新田開発の地域が和賀郡・稗貫郡となっていて、これ以外の場所はどうだったのか不明だが、新田開発の労働力として走り百姓や軽罪犯を利用しようという意図は明らかである。

『藩法』下、八七五頁の『郷村古実見聞記』第巻の「七奥寺古八左衛門取立御新田之事」に、人夫として死罪に決まった男女を利用したという記事があり、また星川正甫の『食貨志』三〇六頁に、宝永二年（二七〇五）に「初て五戸市川新田を開く」とあるので、この新田開発に走り百姓や犯罪者の労働力が利用された可能性もあるが、それほど積極的だったとはいえないように思う。というのは、『雑書』寛保三年（一七四三）閏四月二十三日条（一八巻、三〇九頁）

の記事に次のようにあるからである。

一 五戸市川御新田場へ、御吟味之上向後遠在へ御追放者被遣候筈ニ候処、右御新田場ニは人家も無之、古百姓共計御新田作居候由、依之御追放被遣候ハ、右御百姓共召仕之様ニも仕候て、御新田場段々為作候様ニと被仰出候、

すなわち、遠在への追放者を今後市川新田に送るけれども、現在は人家もなく、既存の百姓が耕作しているだけなので、追放者は独立した百姓として入植させるのではなく、現在耕作している百姓の奉公人のような形で送り込むように、ということであろう。しかし、追放者は犯罪者だから、はたして主人のことをよく聞いて耕作に励んだかどうか。

幕府の人足寄場

このように、盛岡藩は追放刑を受けた者の一部を新田開発の労働力としても利用したが、このことからすぐに連想されるのが幕府の人足寄場である。次にこの点について解説を加えよう。

幕府の人足寄場は、寛政二年（一七九〇）に無罪の無宿を収容して手に職を付けさせることを目的とする、いわゆる保安施設として石川島（中央区）に設置された。無宿というのは、家族や居町村に迷惑をかけるような事件を起こ

す恐れがあるとして、江戸時代の戸籍である人別帳から除かれた者を指す。幕府当局者は、当時の江戸には無宿者が溢れて、彼らは犯罪者の予備軍だと考え、人足寄場を設置して収容すれば、この無宿が罪を犯すのを防げるだろうと考えたのである。

これを設置した立役者は、当時老中だった松平定信と火付盗賊改めだった長谷川平藏である。彼らは、収容した無宿を働かせてわずかながらも賃金を与え、そのうちの幾分かを貯蓄しておいて、もう大丈夫だとなって出所する際、その貯えておいた金銭をもたせ、生活の元手とさせた。また、寄場内で心学という忠孝の大切さを説いたりする学者に話をさせて、内面からも犯罪を防止しようとした。

このように人足寄場は無罪の無宿の収容施設として発足したが、次第に罪を犯した者も収容するようになる。すでに寛政期から軽犯罪者を収容していたようだが、とくに文政三年（一八二〇）からは江戸⁽³⁾払い以上の刑を宣告された者も収容することになった。つまり、人足寄場の性格が変わっていくのである。この性格変化をどう理解するかについては専門家の間で意見の相違があるが、この点については立ち入らない。ここで問題としたいのは、要するに人足寄場も追放刑を受けた者を収容したということである。

ところで、幕府は、この石川島の人足寄場設置と同様に、常陸国筑波郡上郷村（つくば市）にも寄場を設置した。

これは、人足に百姓の仕事覚えさせ、百姓として無人の土地へ送り込むという目的をもったものである。⁽⁴⁾ 実際には荒地を起こし返して作付けをしたらしいので、まさに新田開発である。したがって、形のうえだけを見ると、盛岡藩の追放者を五戸市川新田に送り込むことと、幕府の上郷人足寄場に人足を送り込むのとは、よく似ている。そのため、この二つを同様の性格をもつ施策ととらえる意見もあるが、これはやはり区別して考えるべきである。

すなわち、幕府の人足寄場は無宿者に百姓としての仕事を覚えさせ、将来百姓として土地に定着することを期待するといふもので、それなりに教育刑的側面をもっていたが、盛岡藩の追放者を新田開発に利用する施策は、すでにずっと早く寛文八年（一六六八）にもくろまれ、あくまでも追放者の労働力を新田開発に利用することを目的としたものだからである。

鉾山への追放

一方、鉾山への追放について、何らかの根拠となる法令があったのかどうか、わたしは気付かなかった。しかし、『雑書』の記事をみる限り、安永六年（一七七七）十二月八日条（二九巻、四二六頁）に不行跡の堀江勇右衛門元召仕の長助が水沢銅山（北上市）へ追放となったのが初めての記事である。そしてその後銅山への追放記事がよく出てく

る。安永六年以前にはそれがなかったとは断言できないが、これまたその記事に気付かなかった。追放先の銅山としては、不老倉・尾去沢・鹿角（いずれも鹿角市）などの名が表れる。

もつとも、寛政六年（二七九四）四月十六日条（三五卷、

二八八頁）によると、子藤橘の犯罪に連坐して水沢銅山に追放された浪人岸善藏が、水沢銅山が休山になったため鹿角去沢銅山へ送られているので、追放先の銅山がどこになるかは、その銅山の盛衰にもよったのであろう。また、『刑事』六三七〜九頁では、安永九年（二七八〇）十二月晦日判決として、野田鉄山（野田村）の山内働きの囚人庄右衛門が殺人のうへ逃亡した件で、その番をしていた者や門番などが処罰されているので、追放先は銅山だけでなく鉄山の場合もあった。

問題は、鉾山に送られた追放者がいかなる処遇を受けたかである。上記の例では山内働きとされているし、また身体に障碍があったり病氣だったりして山働きができないという記事もあるので、男の場合は坑内に入って鉾脈を掘ったり水を汲み出したりする労働に従事したものと思われる。それゆえ、彼らは囚人でない他の山働きの者と同様に、鉾山経営者（＝山師）の監督下におかれていたと思われる。『雑書』天明七年（二七八七）五月二十五日条（三三卷、七三頁）、『刑事』七五五・六頁の、水沢銅山へ追放された厨川

通り大沢村（滝沢市）欠落立ち帰り無宿の藤吉への判決文に、山内において我が儘なことをすれば「山法二取行候」とあるので、山師の法に従つての処罰が加えられたことと思われる。

幕府の佐渡水替え人足

江戸幕府は安永七年（二七七八）に、江戸に滞留する無宿対策として、捕らえた無罪の無宿の一部を佐渡の鉾山に送り込んで水替え人足として利用する方策を立てた。坑道のなかに入って噴出する地下水を汲み出す仕事である。たいへんな重労働で、しかも坑内の有毒ガスなどにより健康を害して長生きできないといわれた。

この無宿対策から始められた佐渡水替え人足は、まず天明八年（二七八八）に無罪の無宿だけでなく、軽い盗みで入れ墨や敲きといった刑罰を受けた者をも水替え人足として送り込むようになった。さらに文化二年（二八〇五）には、仕置を申し渡したのち、そのまま放置しておけば再度悪事を働く危険のある者については、有宿・無宿を問わず佐渡へ差遣することになった。ここで考えられているのは、幕府のお構い場所指定方式による追放者である。彼らはとくに監視を受けていないので、再び罪を犯す恐れが強いとみなされたのである。こうして、追放刑と佐渡水替え人足が結びついた。これはまさに、盛岡藩が追放者を鉾山

に送り込んだのとまったく同様の構図といえないだろうか。

盛岡藩でも近世中期以降は無罪の無宿対策が重視されたと思われるが、それでも江戸の町ほどには無宿が滞留したことはないだろう。むしろ罪を犯した無宿こそが盛岡藩の治安対策として重要だったと思われる。そこで、いかなる経緯があったか不明ながら、追放刑を宣告された者を鉾山に送り込むことが思い付かれたのであろう。それが、幕府が無罪の無宿を佐渡へ水替え人足として送り込んだのとはほとんど同時期というのは、おそらく単なる偶然だろうとは思いますが、いささか面白い偶然である。

囚人労働

以上、盛岡藩が追放刑の宣告を受けた者を新田開発や鉾山労働に利用したことを解説した。このような犯罪者として宣告された者を労働力として利用することは何も盛岡藩だけではなく、古今東西広くみられる現象である。例えば、隣の仙台藩（伊達家）には、追放刑を宣告された者を裁判関係の家臣や町村役人に預けて働かせる奴刑があった。⁽²⁾ また、対馬藩（宗家）をはじめとする九州諸藩にもやはり奴刑がある。さらには、明治になると、初期には北海道の開拓や九州の炭坑に懲役囚が送り込まれた。

これらには単に囚人を労働力としてのみとらえる性格が

強いが、現在の懲役囚が一定の労働をするのは、あくまでもその人が犯した罪を償い、真人間に立ち戻るための教育の一環として考えられている。単なる労働力とみるか、それとも教育か、江戸時代においてはその区別を付けるのが難しいこともあるが、視点としては重要である。

七六

(1) 菊池悟朗『南部史要 全』（四版、熊谷印刷出版部、一九七二年、初版は一九一一年）一〇一・一二頁によれば、奥寺八左衛門がこの新田開発を藩に願い出たのは寛文五年であり、その完成は延宝七年である。

(2) 人足寄場に関する研究は多数あるが、さしあたり人足寄場頭彰会編『人足寄場史』（創文社、一九七四年、瀬川政次郎「長谷川平蔵——その生涯と人足寄場——」（朝日選書、一九八二年）のみを挙げておく。

(3) 坂本忠久「天保改革の法と政策」（創文社、一九九七年）「補論二 江戸の人足寄場の性格とその変化をめぐって」（初出は一九九二年）。なお、最近の研究として、高塚博「上州小舞木村郡蔵の寄場入り——幕府人足寄場の機能に着目して——」（『名城法学』六七巻二号、二〇一七年）八八頁以下がある。

(4) 重松一義「日本獄制史の研究」（吉川弘文館、二〇〇五年）「第二編第五章 常州上郷・箱館・横須賀人足寄場——徒刑場・懲役場へと変遷する一形態——」（初出は一九七四年）。

(5) 守屋浩光「江戸時代初期における「寛刑化」と藩政の確立——相馬・会津・盛岡藩を題材に——」（二・完）（『法学論叢』一三五巻四号、一九九四年）九七頁註の参照。

(6) 佐州水替え人足の概略と変遷については、さしあたり服藤弘

司「公事方御定書」研究序説——「寛政刑典」と「榮蔭秘鑑」収録「公事方御定書」——（創文社、二〇一〇年）四〇三頁以下参照。

(7) 吉田正志「仙台藩刑事法の研究」（慈学社出版、二〇二二年）第四章「奴刑」（一八九頁以下）、同「仙台藩の罪と罰」（慈学社出版、二〇一三年）「二〇」奴刑のはなし」（二五一頁以下）参照。

第三節 身体刑の不採用

中国の肉刑

古代の中国には「肉刑」と呼ばれる刑罰があり、それは、宮（＝性器取り去り）・刖（＝あしきり）・劓（＝はなきり）・黥（＝いれずみ）の四つで、さらにこれに加えて死刑があった。この肉刑は、刃物による痛みを加えることや、不具の苦しみを負わせることが目的でなく、肉体を毀傷することで社会的な廃人化をもたらし点に主たる意味をもち、また、肉刑に処された後は特定の賤役に服させるのが一般的だったとのことである。

七世紀前後の隋・唐の時代になると、笞・杖・徒・流・死の五つで構成される刑罰体系が成立し、肉刑はほとんど姿を消した。しかし、宋・清期に附加刑として、配流地名や犯罪の種類を漢文と満文とで顔に入れ墨をした「刺字」があり、「刺字」を加えることを「金印」を捺すといったそう、入れ墨自体はあった。だが、この「刺字」は廃人

化を目的としないので、「肉刑」とは呼ばれなかったとされる。

吉宗による入れ墨刑・敲き刑の採用

八代將軍徳川吉宗は、七代將軍が跡継ぎなく死去したため、和歌山藩主から將軍になった人物で、和歌山藩主時代からよく法律を勉強していて、とくに中国の明の律（＝刑法）を研究していた。そのような関係からだろう、享保五年（一七二〇）に主として盗犯に対する刑罰として入れ墨刑と敲き刑を導入した。入れ墨刑は耳鼻をそぐ刑罰を受ける者より一等軽い犯罪者に科すもので、江戸では幅三分（＝約一センチ）ほどの入れ墨を左腕の肘のすぐ下に二筋廻す刑で、敲き刑は、肩背尻にかけて背骨を除き、氣絶しないように五十回ないし百回敲くもので、牢屋敷の門前において公開で行われた。

この二つの刑は肉体に入れ墨したり痛みを与えたりするものだから、現在の感覚では肉刑（肉体型刑）といってもよさそうだが、中国では、笞で敲く刑は五刑の一つではあるものの肉刑ではないし、また「刺字」を肉刑とはいわなかったと指摘されていることは前述の通りなので、両者とも肉刑と呼ぶのはふさわしくないかもしれない。しかし、わが国では、この入れ墨刑・敲き刑のほか、女性の髪を剃る刺髪刑も含めて「身体刑」と呼ぶこともあるので、こ

も「肉刑」と区別するために、入れ墨刑・敲き刑・剃髮刑を「身体刑」という言葉で表すことにする。

耳鼻を切る

ところで、幕府が享保五年に入れ墨刑を採用した際、それは耳鼻をそぐ刑罰を受ける者より一等軽い犯罪者に科すものと紹介した。このように、幕府には耳鼻をそぐという、まさに肉刑といつてよい刑罰があった。しかし、幕府はこの肉刑を宝永六年(一七〇九)に廃止し、その後享保三年(一七一八)に一旦復活したらしいが、享保五年に入れ墨刑・敲き刑の導入とともに再び廃止したわけである。

なお、例えば会津藩(松平家)や仙台藩(伊達家)では元禄十一年(一六九八)に、幕府が肉刑を利用していないからという理由でそれを廃止している⁽⁷⁾、あるいはもともと早い時点で、実際には肉刑の利用がかなり少なくなっていたかもしれない。一方、相馬藩(相馬家)では安永九年(一七八〇)にようやく耳鼻を切る刑を鞭打ち刑に改めており⁽⁸⁾、二本松藩(丹羽家)では鼻切り・焼き鉄当て・入れ墨・笞・片鬘刺しを近世後期まで利用し、なかでも鼻切り刑は文化十四年(一八一七)に実施された記録がある⁽⁹⁾。なので、だいたい遅くまで利用されている。

盛岡藩の肉刑

このように、どのような肉刑・身体刑をいつまで利用したかは藩によってさまざまだが、それでは盛岡藩はどうだったのか。実はわたしが気付いたその例はごくわずかである。

- ① 『雑書』慶安四年(一六五二)十一月六日条(二巻、五七一頁)、『刑事』六頁、二六五頁

江戸で盗みを働いた三戸^{さんこう}(三戸町)正知院の弟子の覚甚が、耳鼻をそぎ追放すべしと藩より命じられて、永福寺(盛岡市)に身柄を渡された。これは明らかに肉刑が科された事例だが、肉刑を科す主体は藩というよりも宗教者なので、藩の刑罰としての肉刑とはいくぶん性格が異なる。この事例についてはすでに第三章第七節「山伏仕置」の④として紹介した。

- ② 『雑書』承応二年(一六五三)六月二十二日条(同上、七二四頁)、『刑事』六頁、二六五頁

岩手^{いわて}妙泉寺(花巻市)現住の常法院が下人喜助女房に墮落した罪で、永福寺の手によって昨二十一日に新山船場の河原で耳鼻をそがれ鬼柳境から追放された。これまた第三章第七節の⑤で紹介済みである。

- ③ 『内史畧』后三(四巻、一二七・八頁)

寛文三年(一六六三)閏五月に、当時鹿角境^{かののさかい}(鹿角市)役所に勤務していた出石源兵衛の妻が若党の八郎左衛門と密

通のうえ出奔し、探索していた源兵衛が翌四年六月に津輕で彼らを発見した。八郎左衛門は国許に召し運れたが、女房は津輕で成敗して耳鼻をそいでいる。これも、盛岡藩の刑法による耳鼻切りではなく、密通した女房に対する夫による制裁とみるべき事例であろう。

④『刑事』一三頁所掲寛文四年（一六六四）九月十五日処罰

晴山宗務なる者が重科者なので、盛岡に着いたら八戸に遣わし、鼻をそいで八戸の親類に渡し百姓をさせよと藩主より命じられ、同日鼻そぎ刑が実施された。この事例の詳細は不明だが、藩主より鼻そぎが命じられているので藩による肉刑実施例とみていいかと思われる。なお、同年に盛岡藩主逝去により同藩は二つに分かれ、八戸藩が分立している。

⑤『雑書』正徳五年（一七一五）八月二十七日条（一〇

巻、九六〇頁）

葺手町（盛岡市）の長九郎なる者が水主町（同）の着物を干し懸けてある所を通った際、何となく様子が怪しかったので、盗人かもしれないと子どもが追いかけて大川で鳥見の根守弥右衛門が捕らえ、藩で詮議したところ、不屈きの仕方があったとして、右手の中指をもうで他領追放となった。ここでは明らかに藩法として肉刑である指切りが行われている。

しかし、肉刑の事例はこれが最後で、以後には確認できていない。となると、藩の採用した肉刑事例は④と⑤の二例のみで、死刑や追放刑と比べると極端に少なく、とても刑罰体系の一環を占めていたとはいえない。これがなぜなのか、この点こそ問われなくてはならないが、答えを見出せていない。

入れ墨刑もなし

先に、幕府が享保五年に身体刑の一つである入れ墨刑を採用したことを紹介した。この幕府の動きにならって、少なからぬ藩でも独自に入れ墨刑を採用しているが、実は盛岡藩には入れ墨刑がない。ただし正確にいうと、天保十一年（一八四〇）四月二十九日に申し渡された三件の判決において入れ墨がみられ、このことはすでに故熊林實氏によって指摘されている。具体的には以下の三件である。

①『事例』四項「盗賊之類」

安儀通り十二ヶ村（花巻市）の辰が、去々年十一月一日に奉公して恩義のある同村の八十右衛門方へ忍び入り、かねて土蔵を破っておき、同村寛兵衛と申し合わせて衣類・品々を盗み取ったうえ、調べに際して数度偽りをいったこともあり、所において打首と申し渡されるべきであるが、目出度い時節なので死罪を一等有し、入れ墨のうえ菩提所へ預けて出家得度することを命じられた。

② 『同上』六項「乱心・酒乱」

櫛引八幡(八戸市)の元神主伊織が去年九月に四、五人で酒を呑み、安兵衛と口論になって、次の間においてあつた脇差で安兵衛を切り殺し、円慶へも疵を負わせたことにより、牢前において打首とされるべきところ、目出度い時節なので、入れ墨のうえ菩提所へ預けて出家得度することを命じられた。

③ 『同上』七項「贖金」

贖金造りに関連した毛馬内(鹿角市)給人高橋小平・伴六太郎、毛馬内通り中町(同)の万次郎・仁八、黒沢尻通り(北上市)の喜吉・仁平、三戸通り(三戸町)の九八・申松の七人が、いずれも入れ墨のうえ菩提所へ預けて出家得度することを命じられた。これまた目出度い時節を理由とした赦による減軽であることは①②と同様である。

入れ墨刑に関する記事はこれだけで、どのような形の入れ墨がどこに入れられたのかといったようなことは皆目分らない。いずれも御祝儀の赦による減軽を受けて、菩提寺に預けられて出家得度することを命じられているので、犯罪者であることの何らかの印が必要と考えられたのかも知れないが、犯罪者としての烙印である入れ墨のあるお坊さんというの、いかがなものだろうか。

なお、仙台藩でも入れ墨刑がなかったが、それを採用しなかった理由として、入れ墨があると前科者であることが

はつきりして真人間に戻りづらいということが、幕末期に唱えられたことを紹介したことがある。⁽¹⁾盛岡藩が、上記三件を例外として、入れ墨刑を採用しなかった理由は何か、それをぜひとも知りたいものである。

敲き刑もなし

盛岡藩は吉宗が幕府法に導入した身体刑である敲き刑も採用しなかった。他方、おそらく幕府にならつてのことだと思ふが、二本松藩では寛延元年(一七四八)、相馬藩では安永九年(一七八〇)、さらに庄内藩(酒井家)では寛政三年(一七九二)、秋元家時代の山形藩でも翌寛政四年に敲き刑を採用している。⁽²⁾ところが、盛岡藩は最後まで敲き刑を利用しなかったようである。

盛岡藩が幕府の敲き刑の存在を知らなかったとはとうてい思えない。幕府の敲き刑は江戸小伝馬町(中央区)の牢屋敷の門前で公開して行われるもので、誰でもみられるため、江戸に詰めた盛岡藩関係者のなかには、この江戸の敲き刑をみたことのある者がいただろう。そして、それがとくに盗犯に対する刑罰ということまで知っていたならば、盛岡藩でも盗犯への対応が重要だったから、敲き刑の採用が話題になったかもしれない。しかし、盛岡藩はそれを採用しなかった。それは一体なぜなのか。入れ墨刑の不採用と同様、この敲き刑不採用の理由を求めることが重要な

だが、わたしはいまだにこの答えを出すことができないでいる。

剃髪刑もなし

江戸幕府『公事方御定書』下巻には、二ヶ所に女性の髪を剃る刑が規定されている。その一つは第四八条「密通御仕置之事」第一六項で、離別状を取らないで他の男に嫁いだ女に対して、髪を剃って親元へ帰す刑が科される。江戸では、離別状（三行り半などという）は夫だけが出せるもので、これは離婚を証明するとともに、再婚許可証でもある。それゆえ、再婚の許可を元の夫から得ないうちに他の男に嫁ぐと、いわば重婚になってしまい、それに対する刑罰が剃髪刑というわけである。もう一つの剃髪刑は第四九条「縁談極候娘と不義いたし候もの之事」にあり、許婚がいるにもかかわらず他の男と関係をもった娘が、やはり髪を剃って親元に渡されることになっている。江戸時代の許婚は准夫婦関係といってもいいほど強い効果をもったので、それに違反した刑罰として剃髪刑が採用された。相手の男は軽追放に処される。

この二つの剃髪刑はいうまでもなく女性だけに科される刑罰だが、盛岡藩の『文化律』にはこの剃髪刑がない。前の離別状を取らずに他へ嫁した者については、第六四条「密通之者御仕置之事」第三項にその規定があるが、そ

の刑罰は「三ヶ年縁談構、親本え相渡」となっている。一方、後者の許婚以外の男と関係した娘については、『文化律』第五二条「縁談極候娘と不義致候者之事」において、相手の男は軽追放と幕府法と同じだが、女は「三ヶ年縁談構、親元え相渡」となっていて、しかもここには、「髪ヲ剃とアリ」という註記があつて、これは明らかに幕府『公事方御定書』下巻では髪を剃りとなっていることを示すものである。

以上のように、盛岡藩は、江戸幕府の剃髪刑の存在を十分知っていたながら、あえてそれを採用せず、その代わりに三ヶ年縁談を禁止して親元へ渡すという措置を採ったことになる。幕府法には三年間の結婚禁止という措置はないが、髪を剃られると、実質的には結婚はできないだろうから、結果は同じことだともいえるが、当時の女性の立場を考えると、髪を剃られるというのは強い恥辱を受ける刑罰だと思われるので、盛岡藩ではその恥辱を与えていないことになる。

付け加えると、実は敲き刑についても、「答は恥なり」という言葉がある⁽¹⁹⁾ので、公開で敲き刑を行うことは、その受刑者に痛みを加えるだけでなく恥辱をも与えることが目的の一つだったといわれる。また、入れ墨も前科者であることを明示して受刑者に恥ずかしい思いをさせる刑罰だったといえる。つまり、盛岡藩は、入れ墨刑・敲き刑・剃

髪刑といった、恥辱を与える身体刑を採用しなかったわけである。盛岡藩は、恥辱を与える身体刑をなぜ採用しなかったのか。これは、盛岡藩刑法の性格を考えるうえで決して無視できない問題ではなからうか。

- (1) 仁井田隆『中国法制史』（増訂版三刷、岩波全書、一九六五年）八三・四頁。
- (2) 滋賀秀三『中国法制史論集 法典と刑罰』（創文社、二〇〇三年）「第二章 中国上代の刑罰についての一考察——誓と盟を手がかりとして——」（五三八～四三頁、五五二頁註（44）、初出は一九七六年）。
- (3) 同上。
- (4) 石井良助編『享保撰要類集（第二）』（近世法制史料叢書別篇 弘文堂書房、一九四四年）「二 都て御仕置筋之部」一四号「入墨御仕置被 仰出候事」・一五号「殿御仕置相極候事」（六三頁）。
- (5) 例えば、石井良助『江戸の刑罰』（中公新書、一九六四年）六一頁以下。
- (6) 石井良助『日本刑事法史』（法制史論集一〇巻、創文社、一九八六年）「第一 刑罰の歴史（日本）」（八二頁、初出は一九五二年）。
- (7) 吉田正志『仙台藩の罪と罰』（慈学社出版、二〇一三年）「二 入れ墨刑がなかったはなし」（一七六・七頁）参照。
- (8) 中澤巷一監修・京都大学日本法史研究会編『藩法史料集成』（創文社、一九八〇年）「中村藩 解題」（二三頁、林紀昭氏執筆）。
- (9) 藩法史料叢書刊行会編『藩法史料叢書』6・二本松藩（吉田

- 正志担当、創文社、二〇一五年）「解題」（三六頁）。
- (10) 熊林實・南部盛岡藩の追放刑について」（上）（『岩手史学研究』六五号、一九八一年）三五頁註（27）。
- (11) 吉田正志『仙台藩の罪と罰』一七九頁。
- (12) 註（9）所掲『藩法史料叢書』6・二本松藩「解題」（三三四頁）及び前註所掲『仙台藩の罪と罰』一八〇・一頁参照。
- (13) 高塩博『江戸時代の法とその周縁——吉宗と重賢と定信と——』（汲古書院、二〇〇四年）「江戸時代の刑罰——笞打ちと入墨——」（一五三頁、初出は二〇〇〇年）。

〔未完〕